

<コラム⑤> ゆるキャラを通して考える近現代史:

レルヒとハプスブルク帝国

辻河 典子

2019年は日本とオーストリアとの国交樹立150周年でした。オーストリアといえば、新潟県にオーストリアとゆかりのあるレルヒさんというゆるキャラがいます。このレルヒさんは、日本にスキーが紹介されて2011年に100周年を迎えるのを記念した新潟県の観光キャンペーンのために、地元の印刷・広告会社が制作しました。茶色い口ひげの付いた細長い顔と細長い胴体(公式設定では身長は「およそ2700mm(季節により変動)」<https://www.niigata-snow.jp/lerch/profile/> [閲覧日2020年3月1日])、黄色(同じく公式設定では「幸せのウコン色」)の帽子と服という姿をしています。決してかわいいとは言えませんが、2009年11月に活動を始めてからメディアや SNS で徐々に知られるようになり、2011年には日本全国のゆるキャラの人気投票である「ゆるキャラグランプリ」で10位を獲得しています。現在のレルヒさんは、全国区のメディアには余り登場しませんが、引き続き新潟県の観光キャンペーンでは活躍中で、ひらがなとカタカナを交換して書くなどの独特の「レルヒ語」を使って、ブログや SNS で自身の活動についての情報を発信しています。

このレルヒさんのモデルとなったのは、かつてヨーロッパに存在した帝国オーストリア＝ハンガリー(いわゆるハプスブルク帝国)の軍人で、日本における本格的なスキー技術の導入に貢献した人物テオドル・エドレル・フォン・レルヒ(Theodor Edler von Lerch)です。ハプスブルク帝国といえば、ミュージカル「エリザベート」(初演1992年)を通じて、伝統的で華やかだけれどもやがて滅びゆく運命にある黄昏の王朝というイメージを持つ人が日本でも多いかもしれません。ハプスブルク帝国の軍人であったレルヒの前半生は、ちょうどこの「エリザベート」で扱われる時代と重なります。軍人レルヒを通じてハプスブ

ルク帝国の歴史の一端を覗いてみましょう。

レルヒは1869年にプレスブルク(現在のスロヴァキアの首都ブラチスラヴァ)に生まれました。1891年に軍事アカデミーを卒業後、帝国各地に派遣される中で、彼は軍隊でのスキー訓練に関心を抱くようになりました。アルペンスキーの創始者マティアス・ツダルスキ(Mathias Zdarsky)に師事し、帝国の陸軍が山岳地帯で雪の上を効率よく進むためにスキーを導入することに貢献します。

1910年10月から1912年9月にかけて、レルヒは日本に滞在しました。ハプスブルク帝国を含む当時のヨーロッパ列強は、日清・日露戦争に勝利した日本の兵器システムを日本で調査しようとしていました。レルヒの滞在中も、日露戦争からの知見を集めることが目的だったのです。一方、日本陸軍もレルヒが母国で導入したスキー技術に関心を示します。1911年1月12日、レルヒは陸軍第13師団長だった長岡外史の招きにより、新潟県中頸城郡高田(現在の上越市)の金谷山で将校たちにスキー技術を指導しました。これが日本でのスキーの普及の始まりとされています。このように、レルヒの日本滞在中は20世紀初頭の列強間の国際関係と非常に深く関わっていました。

1912年9月に日本を去ったレルヒは、翌年1月にウィーンに戻り、第一次世界大戦にも従軍しました。第一次世界大戦後は軍事に関する講演を度々行い、1945年12月に亡くなりました。

ハプスブルク帝国の領域は、現在のオーストリアとハンガリーだけでなく、チェコ、スロヴァキア、スロヴェニア、クロアチア、イタリアの一部、セルビアの一部、ルーマニアの一部、ポーランドの一部、ウクライナの一部、モンテネグロの一部、最終的にはボスニア＝ヘルツェゴヴィナまで及びました。そのため、首都ウィーンでの政治にはドイツ語が用いられていましたが、他にもハンガリー語、チェコ語などのスラヴ系諸語、イタリア語、ルーマニア語、さらには正統派ユダヤ人によるイディッシュ語など、日常的に多様な言語が飛び交っていました。それは、レルヒが生まれたプレスブルクでも同様でした(コラム④参照)。

19世紀に入ると、ヨーロッパではナショナリズムとよばれる思想・運動が高まりました。

ナショナリズムとは、言語や文化、歴史を共有する集団を「民族」としてとらえる考え方です。ハプスブルク帝国も例外ではなく、ドイツ語を母語としない人たちの民族意識が高まりました。レルヒはまさにそのような時代に生まれ育ったのです。

レルヒが所属したハプスブルク帝国の軍隊でも、多言語な環境に対応した制度が採用されました。帝国全土の防衛に当たる共通軍は、各地から徴兵された兵士たちで構成されました。共通軍では、一般兵は簡単な命令用語をドイツ語で覚えれば、それ以外は自分の母語で軍隊生活を送ることが(名目上は)可能でした。一方、兵士の教練担当の将校は各地の連隊を異動しながら昇進するため、帝国内で話される言語を複数理解できることが求められました。ただし、将校の間では、帝国内の政治で用いられる言語であるドイツ語を話す人の比率が非常に高かったとされています。

このように、19世紀後半から20世紀初頭にかけてのハプスブルク帝国では、ドイツ語優位の状況と各言語集団のナショナリズムの高まりという緊張関係の中で調整を行っていたのです。

第一次世界大戦を経てハプスブルク帝国は解体し、一つの民族を単位とする諸国家(国民国家)が中央ヨーロッパに誕生しました。しかし、オーストリアでは1920年代末になると、作家のヨーゼフ・ロート(Joseph Roth)らのようにハプスブルク帝国の時代を懐かしむ人々が現れました。ウィーンをはじめとするドイツ語圏では、帝国時代を扱ったオペレッタや映画が上演されました。同種の作品がハリウッドでも作られ、華麗だが退廃的というハプスブルク・イメージの流布に重要な役割を担いました。

1930年代のヨーロッパではファシズム勢力が台頭し、ついには第二次世界大戦が勃発します。ハプスブルク時代を懐かしんだ作家たちにとって、これらの出来事はハプスブルク時代から引き継がれた世界が完全に破壊されるもので、在りし日を懐かしむ気持ちを一層強めました。作家シュテファン・ツヴァイク(Stefan Zweig)の自伝的小説『昨日の世界』(1942年)はその象徴的な作品で、ハプスブルク帝国に黄昏の帝国というイメージを与える上で大きな意味を持ちました。

しかし、レルヒも属したハプスブルク帝国の軍事制度や彼の来日の目的から明らかになるのは、「昨日の世界」としてのノスタルジックな多言語空間ではありません。むしろ、帝国内のナショナリズムへの対応に迫られた統治原理や20世紀初頭の日本を含む列強間の国際関係です。レルヒを語る際には、この観点を忘れてはならないでしょう。



← レルヒがスキーを指導した金谷山にある案内板。ゆるキャラのレルヒさんが中央部に描かれている。(2020年3月4日、筆者撮影)



↑ウィーンの軍事史博物館にあるレルヒに関する展示。左上・右上・下の順に、レルヒの肖像写真、日本での指導の際の用具類、金谷山でスキーをする将校夫人たちの様子。(2019年2月24日、筆者撮影)